

日本国内の特徴ある約 70 港を中心に、  
私たちの生活や産業を支える港をオールカラーで解説。

# 日本の港

「図説 日本の港」編集委員会 [編]

[編集委員長] 樋口嘉章

◆ B5 判 180 頁

◆ ISBN 978-4-254-26181-3 C3051

- ◎ 四方を海に囲まれた日本において、港は古くから人々の営みと深く結びつき発展してきた。
- ◎ 本書では約 70 の港を取り上げ、それぞれの歴史、文化、地形的な特徴、役割、魅力などを紹介。さらに冒頭の総論パートでは港の基礎知識が得られるように工夫した。

## 第 1 部 総論

「港湾」の定義／港湾の歴史／港湾の種類／港湾のステークホルダーまたは港湾に関係する主体／港湾の施設／島国日本の暮らしを支える港湾／港湾が果たす多様な役割、新たな社会環境への対応／港湾で見ることができる船／港の荷役機械

## 第 2 部 各論

**北海道** 稚内港／釧路港／小樽港／苫小牧港／函館港／室蘭港

**東北** 八戸港／秋田港／釜石港／酒田港／仙台塩釜港／気仙沼漁港・気仙沼港／小名浜港

**北陸** 新潟港／両津港／金沢港／伏木富山港／敦賀港

**関東** 茨城港（常陸那珂港区）／鹿島港／東京港／横浜港／横須賀港／三崎漁港／湘南港／銚子漁港／千葉港

**中部** 清水港／名古屋港／三河港／津松坂港／四日市港

**近畿** 大津港／舞鶴港／大阪港／神戸港／和歌山下津港

**中国** 境港／浜田港／宇野港／水島港／下関港／徳山下松港／広島港／呉港

**四国** 高松港／松山港／今治港／徳島小松島港／高知港／手結港

**九州** 北九州港／博多港／伊万里港／佐世保港／長崎港／八代港／水俣港／別府港／大分港／細島港／志布志港／鹿児島港／枕崎漁港／名瀬港

**沖縄** 那覇港／石垣港／南大東港

**コラム** 海と船が見える坂道（みなと坂）／石油の国家備蓄／近代港湾の先駆け 明治三大築港／北前船／臨港鉄道／渡船（渡し）／面白土木／軍港 日本遺産旧海軍鎮守府 4 港／瀬戸内海／石灰石とセメントの港／面白橋梁／港と釣り

## 第 3 部 付録

港湾取扱貨物量の推移／港湾取扱貨物量ランキング／みなどの博物館ネットワーク・フォーラム 会員館一覧／ほか



2025 年  
6 月  
刊行！

## 「港湾」の定義

「港湾」とは、陸地あるいは橋樑などの人工構造物と船との間で、貨物の積み下ろし（荷役）や人の乗り降りなどの活動が行われる場所ならびにその機能を指す。広義には、これらの活動を支えるため空間及び関連サービスなどを含む総合的な概念として用いられる。

近代港湾では船が岸壁に直接横付けして荷役や旅客乗降を行うことが一般的であるが、歴史的には比較的新しいことである。帆船時代には目的港の沖合に錨泊（錨（アンカー）を下ろして停泊）し、貨物や乗客が岸（陸と沖合に停泊中の本船の間を乗客・荷物を載せて運ぶ小舟）に積み替えて陸上に運ぶことが通常であった。船が安全に停泊し、荷役などを行うためには、波や潮流、風などを避ける地形条件や、座礁しない十分な水深が求められる。このため、古くから発展してきた、港町の古名には湊、泊、津などのほか、浦、江、潟など、港に求められる条件を満たす地形を指す字が含まれる事例は多い。

「港湾」という言葉は、明治初期の『米欧回覧実記』（久米邦武編）で、port and harbor (u)r の訳語として使われ始めたと考えられる。port はラテン語の portus（入り口）が語源であり「港」（「みなと」は「水の門」の意）に近い。一方、harbor (u)r は古英語 herberwe（泊まる）、herbergian（休憩する）が語源であり「湾」（船が安全に停泊したり荷物を積み替たりできる入り口）に近いといえる。

また、「港」の荷役、乗降などが行われる出入口口としての機能を航空輸送にあてはめて「空港」（airport）と称するが、これと対比するために「海港」（seaport）という表現が用いられることがある。「海港」は「河川港」（river port）に対比した言葉でもある。（樋口嘉章）

## 港湾の歴史

### 1 古代から江戸時代まで

人間が舟で海を越えて移動し交易することは、文明の成立以前から行われていた。道路から発掘された黒曜石を例にとろう。この石は剥離加工によって鋭利な石器となるため、旧石器・新石器時代を通じて重要な材料の一つであるが、長野県和田峠、伊豆諸島の神津島、隠岐島、北海道の十勝・白糠など、限られた場所では産出しない（図1）。それにもかかわらず、旧石器時代の関東地方、中国・四国地方、北海道などに分布している。約2.2万年前に神津島の黒曜石が樺太（サハリン）の道庁まで運ぶなど、成分分析によって特定された。縄文時代の遺跡から丸木舟が出土して古石の輸送も丸木舟によると考えられる。縄文時代後期の加茂遺跡で出土した丸木舟の長さ4.8m、幅60cm）ので、それに適した

ない遮蔽された水域が利用されたのであろう。我が国についての最古の記述は、紀元前2世紀の『漢書』地理志にみられる。「夫れ東海海中に倭人有り、分かれて百余国と爲る。歳時を以て来たり献見すと云ふ。」（『朝鮮の』東海郡の海の方々に倭人がいて、その国は百あまりに分かれていた。倭人からは定期的に貢物を献上していた。）との記述から、紀元前1世紀頃には日本と大陸との間に行き来があったことが窺われる。

3世紀の『魏志倭人伝』には、朝鮮半島と交易を行った対馬や支国（老岐）についての記述がある。対馬については、島の中央に広がる天然の良港、浅茅湾などの静穏な水域が船の停泊地として交易に利用されていたと考えられている。一方、老岐については、一支国の都の跡とされる原

湖）に成立したが、そこは極めて不安定な自然環境であったため、津波や高潮、土砂の堆積などによって、跡形もなくなってしまう。このため、一般的に古代の港については、地名はわかるものの規模や施設の種類など詳細は不明なものである。原の辻遺跡から船着き場跡が出土したのは福井川の河口部から約1.8km上流という立地のゆえに、波などの影響を受けなかったためと考えられるが、例外的な事例といえる。

600年の第1次遣隋使船を端緒として、その後630年に始まった遣唐使船は838年に至るまで、十数回に及んだ。当時の我が国の代表的な国際貿易港は、九州北部の那覇津（現・博多港）と大坂湾の難波津（現・大阪港）だった。難波津については、720年に勧修された『日本書紀』巻11の「仁徳天皇11年冬10月の条に、難波の高津宮に都を遷す」とあるが、宮の北部の野を掘り、南の

### 北海道

#### 函館港

歴史が息づく青函連絡船と北洋漁業の拠点港

港名：重要港湾  
所在地：北海道函館市  
港湾管理者：函館市



図1 函館港全景（提供：北海道開発局）

函館港（図1）は渡島半島の南端に位置し、津軽海峡を隔てて本州と対峙する天然の良港である。海中より隆起した函館山は陸繋砂州によって亀田に連担して巴の形状をなし、港は静穏で「網知らずの港」といわれた。函館山頂や麓からの眺望（図2）、特に夜景の美しさは有名である。日本海の海運は早くから開け、室町時代には越前・若狭との間に海運があったが、寛永年間（1624～1643年）に西回り航路が開発され大坂に達するようになると、松前藩（松前、江差、箱館（1869年に函館となる））出入の船舶もその航路を利用し大坂に連絡するようになった。特に箱館は、1799年に蝦夷島（北海道）が幕府の直轄となり奉行所が置かれて以降、津軽海峡の連絡航路及び国内沿岸航路の拠点港として発展した。1854年に日米和親条約により下田とともに薪炭・食料の補給地として開港し、1858年には日米修好通商条約により我が国初の貿易港となった。



図2 函館山八幡坂からの眺望。奥は旧青函連絡船埠頭丸。

明治20（1887）年代に入ると、港湾商業都市としての発展期を迎え、船渠会社、セメント会社、海運業を中心として産業資本が形成され、市街地が拡大し都市形態が大きく変わった。海運業が発展すると、それと密接な関係にある港湾運送業・保険業・保険代理業も盛んになった。西部地区の臨海部には海運業や海産物の建物、営業倉庫などが集中した。

本州との交通アクセスも大幅に改善され、1891年に上野・青森間、1904年に小樽・函館間の鉄道が全通すると、1908年には当時最新鋭の田村丸と比羅夫丸が青函航路に就航した。1910年、



図3 金森赤レンガ倉庫群。

停車場付近の海の岸壁を有する橋）が完成し、船・下船ができる客と鉄道車両を開設し、1925年の函館は、樺太・ケ・マス漁業の基産物のサケ・マスが、大正期から昭和に伴いその根拠地ケ・マス・カニの産などに、またスル

第2次世界大戦後引したのは、北洋沖にある。北洋鮭鱈漁業のもの、1952年にしかし1977年の「2定によって漁場を縮減した。

一方、青函航路に船4隻と車運搬船は全船が就航した。1及はした洞爺丸台風をられ、1970年代前半にクをえたが、航空機

読者対象

港・海運・地理・歴史・まちづくりなどに興味をもつ一般読者、地理学・観光学・港湾工学を専攻する学生、公共図書館・学校図書館

切り取り線

ご希望のお客様は、下記よりご確認ください。 ※価格は本体価格です

## 図説 日本の港

同時アクセス数 1：14,190 円

同時アクセス数 2：21,285 円

同時アクセス数 3：28,380 円

ProductID：KP00120478

販売対象機関：すべての機関



紀伊国屋書店 学術電子図書館

KinoDen  
Kinokuniya Digital Library

紀伊国屋書店 デジタル情報営業部 Mail: ict\_ebook@kinokuniya.co.jp